

クリティシズム，構造主義，ポスト構造主義

—主体概念の検討に向けて—

吉田正岳

I イギリスの理論的状況

ポスト構造主義をめぐる議論は、昨今の日本でもかまびすしいが、イギリス・マルクス主義に於ても、いわゆる「ポスト・アルチュセール」をめぐる議論が70年代の半ばからなされている。歴史学・史的唯物論の分野での、B・ヒンデス、P・Q・ハースト、N・プーランツァス、等の動向は小山陽一教授が「N・プーランツァスの階級理論の周辺」（『社会学評論』第130号、1982年）で述べられている所であるが、ここでは分野を少し違えて、クリティシズムの領域での構造主義、ポスト構造主義に対するマルクス主義文芸批評家の受け取り方を中心として追ってみたい。この追跡の試みは、以前、拙稿「政治とクリティシズム」（『一橋研究』第7巻第4号、1983年）で試みた70年代のR・ウィリアムとT・イーグルトンを中心としたイギリス・マルクス主義文芸批評展開の跡付けの続編の一部を成すものである。

80年代に入り、R・ウィリアムズは「マルクス主義、文学分析」（NLR, No. 129⁽¹⁾）、他方、T・イーグルトンは「ヴィトゲンシュタインの友人達」（NLR, No. 135⁽²⁾）という論文を発表し、ポスト構造主義、とくにJ・デリダの方法に対する興味深い対応をみせるに至った。この二人の考え方を現時点でおさえておくことは、今後のマルクス主義の展開に関して参考になる所があると考え。

この二人の最近の考え方に入るまえに、イギリス・マルクス主義の潮流に関する概括から二、三のものを紹介しておこう。

デイブ・レイングは『マルクス主義芸術理論』⁽³⁾の最後の箇所で、イギリス・マルキストのアクチュアルな活動の新展開として次の三つを挙げている（1970年代）。それは、① ‘オールタナティヴ・シアター’ 運動、② CCCSグループ（Center for Contemporary Cultural Studies at Birmingham University）の

活動、③“スクリーン”グループの活動、の三つである。

①のオールタナティヴ・シアター運動は、ここではさておき、②の CCCS⁽⁴⁾グループについて述べると、これは最近ロンドン大学に移ったR・ホガートが中心人物の一人になっていたもので、バーミンガム・グループとも呼ばれている。「バーミンガム大学現代文化研究センター」の名の通りバーミンガム大学に本拠がおかれ、青年文化、労働者文化、サブ・カルチュア、マスコミュニケーション、等にすぐれた業績を挙げてきた。⁽⁵⁾現在は、スチュアート・ホールが中心となって研究をすすめている。“*Resistance Through Rituals*” (eds. by Hall & Jefferson, 1976) 等にもみられるように、60年代の若者文化、労働者文化が、商品化、無階級化されていく様^{さま}の分析を行ってきた。この労働者文化研究の方向は、ウィリアムズやE・トンプソンらの文化論的唯物論（文化論的マルクス主義）と軌を同じくするものであった。⁽⁶⁾

レイングが第三番目に挙げているグループは、雑誌“スクリーン”に拠るグループで、その名の通り、映画理論、映画評論に関する活動を行っている。70年頃から、旧い新左翼に特徴的なアプローチであった「ポピュリズム」とは手を切る形で、フランスの『テル・ケル (Tel Quel)』、『カイエ・デュ・シネマ (Cahiers du Cinema)』の影響を受け、C・メッツ (C. Metz) J・クリスティヴァ (J. Kristeva) 等の理論的影響下に置かれている。「フロイト+マルクス」によって唯物論の前進を探求している。フロイト理論の唯物論への導入によって、ラカン、アルチュセール、クリステヴァ、バルト等のフランス構造主義、とくにマルクス主義と関係をもっているそれ、がイギリス・マルクス主義に導入されることになったのである。

先程、注で述べたカワードの CCCS グループ批判が、いわゆる構造主義を一步おし進めた立場からなされているというのも、今述べたような事情を反映してのことである。

D・レイングの最近のイギリス・マルクス主義の活動の紹介は、R・ジョンソン (Richard Johnson) の British Sociological Association (BSA) の報告集 (論文集) “*Ideology and Cultural Production*” (Billing & Sons, 1979) に載せられた ‘Histories of Culture / Theories of Ideology: Notes on an Impasse’ に於けるイギリス・マルクス主義の潮流のおさえ方とも対応している。そこでジョンソンは、イギリス・マルクス主義の現状をE・トンプソン、R・

ウィリアムズに代表される文化論的マルクス主義（Cultural Marxism）とB・ヒンデス、P・Q・ハースト等の構造主義的マルクス主義〔構造主義者〕との対決関係の図式を設定して描き出している。文化論者と構造主義者達をそれぞれ一枚岩的に描き出すこういった整理の仕方は、イギリスの現状に必ずしも妥当するものではないというM・バレット達の指摘を考慮するとしても、イギリス・マルクス主義の潮流の概観に資するところがある。この概観を一旦受け入れた上で、現在のイギリスの状況をみなおすと、ヒンデス、ハースト等のポスト・アルチュセリアンの動向は、いわゆるポスト構造主義がクリティシズムの分野で論じられるようになる動向とほぼ時期を同じくしていることがわかる。この二つの大きな対決的潮流は、60年代のイギリス左翼の理論的最前線に於ける理論的対決を継承したものである。

R・ジョンソンは、イギリスの理論的動向を二つの主要段階に分けている。最初は「文化」の時期（the moment of 'culture'）で、それはオーソドックスなマルクス・レーニン主義、伝統的な「労働史」からの訣別、生産様式と経済的移行よりも階級と文化を強調することを特徴としていた。60年代の新しい歴史学は「人民」のコミュニン的行動の態度や諸形態にとくにかかわり、1850年の後のプロレタリアートよりもむしろ「原初的反抗」（primitve rebels）に関心を向けていた。政治的にみると、この局面は、1956年の危機と分離（secession）と時期が一致し、「ニュー・レフト」と一種の共産主義的もしくは社会主義的ポピュリズムの形成と時を同じくしていたのである。それは、現代コミニズムが過去の人民民主主義的闘争をひきついでいるとみなす歴史学的分折に深く影響されていたのである。⁽⁸⁾ こうした傾向を推進した人々に、R・ホガート、R・ウィリアムズ、E・トンプソン、E・J・ホブズボーム、クリストファー・ヒル、ドナ・トル等がいる。⁽⁹⁾

これに続く第二の時期を、大文字の理論の時期（the moment of Theory）と呼べるだろうとジョンソンは言う。この時期の特徴のひとつは、マルクス主義思想に於ける一種の共通マーケットの確立をみたことであって、それは主に『ニュー・レフト・レビュー』誌の新しい編集者によって促進された。彼らは、イギリスの地方性、労働者階級の不活性、マルクス主義文化の不在という欠陥を外国からの書物の輸入によって補填しようとした。それは民衆の政治との現実的な結合の犠牲の上に追求されたので、50年代～60年代初めにかけての初

期の左翼的傾向の人々にとっては全く奇妙にみえた。このことをめぐって60年代中期の、ベリー・アンダーソン、トム・ネルン、エドワード・トンプソンのあいだでの論争が起ったのである。結果はどうであれ、『ニュー・レフト・レビュー』誌の計画が、イギリス・マルクス主義の議論の性質を変えることに助勢したことに疑問の余地はない。こうした経過の中でルカーチが紹介され、グラムシが紹介され、アルチュセールが紹介された。そしてアルチュセールの理論から、強力な新（ポスト）^{ネオ}・アルチュセーリアンの傾向がイギリスのとくに社会理論の分野で発展してきたのである。そしてこの時点でイギリス・マルキストの議論は、それ以前よりは地方的・偏狭的な性格を脱することになったのである。そしてまた、先に述べた「文化論的マルクス主義」と「構造主義」の対立図式が生ずるに至ったのである。

上の対立関係に於ては、「構造主義者」の方が活発な批判を展開した。他方、文化論的マルキストからの「構造主義者」への攻撃は多くないが、R・ウィリアムズの“*Marxism and Literature*”（1977）と‘Two interviews with Raymond Williams’, “*Red Shift*”（Cambridge）nos. 2 and 3, 1977が代表的なものである。

文化論的マルクス主義と構造主義との対立ということを中心に述べたが、これは70年代中頃までの図式であろう。少し前に新アルチュセーリアン^{ネオ}について触れておいたし、また周知の如くポスト構造主義の台頭をみるに至って、70年代末から80年代に入って新しい理論的布置連関を取るようになった。そして、R・ウィリアムズとイーグルトンは本論の冒頭に記した論文を発表するに至ったのである。

II R・ウィリアムズとポスト構造主義

構造主義の批判者R・ウィリアムズは、ポスト構造主義の台頭に対して興味ある理論的対応をとっている。それを示す論文が「マルクス主義、構造主義、文学文析」（NLR, No.129, 1981）である。彼はここで、文学理論上の構造主義を歴史的に整理したあと、セミオティクス（記号論）とディコンストラクションの検討を自らの立場と関連づけて行っている。この論文は、以前、拙稿「政治とクリティシズム」で紹介したR・ウィリアムズとは異なる新しい彼の像を伝えるものであるが、ポスト構造主義の評価に関しては、それまでの彼の理論

の延長線上で理解しうるものである。イーグルトンの同年に出版された“Walter Benjamin”(1981),及び‘Wittgenstein’s Friends’(NLR, No.135, 1982)でとった彼の立場、即ちポスト構造主義に対する厳しい対決姿勢を考えると、ウィリアムズのポスト構造主義に対する評価は非常に興味深い。

ウィリアムズのNLR, No.129の論文は全体としてマルクス主義文学理論の再概括ともなっているが、その中で構造主義と記号論^{セミオテツクス}について言及した章を紹介しておこう。

「構造主義＝長い間行方不明のイトコ？」の章題の下に、ウィリアムズは、①60年代にフランスから輸入された構造主義（構造主義的文芸批評）、②L・ゴールドマンの発生論的構造主義、③P・マシュレーとT・イーグルトンの構造主義的マルクス主義について論じ、ポスト構造主義に関しては「記号論とディコンストラクション」^{セミオテツクス}の章題の下に扱っている。

ウィリアムズはいわゆる構造主義的文学研究を、作品の内的な規則に支配されたシステムの解明を試み、文学それ自体を孤立的、自律的に扱う方法とみなしている。そこから「構造主義＝長い間行方不明のイトコ？」という章題も出てきているのである。20年代末、30年代初めのケンブリッジでは、文芸作品の自律性を強調する実践批評が盛んであった。I・A・リチャーズ(I. A. Richards)の『実践批評』は1929年に出版されている。実践批評とは、無記名の詩を読解の素材とし、詩の孤立した内的組織を読み取るもので、その態度は、作品の孤立性・自律性を前提とするものであった。この実践批評は、F・R・リーヴィスを中心とする『スクルーティニー』誌の方法と混合し、経験主義的批評を生み出していった。

そして、北アメリカのニュー・クリティシズム(新批評)もまた、文学作品の自律性を前提とする点では実践批評と立場を同じくするとウィリアムズはみなしている。

ともあれ、ケンブリッジで起ったことは、テキストそのもの、詩そのものに立ち向い、孤立的な内的構造を探究するという方法であって、それはフランスを經由して60年代にイギリスに導入された構造主義文芸批評・文学研究の方法と性格を一にするというのである。それゆえ現代の構造主義は、構造主義言語学の成果を応用するものの、「長い間行方不明のイトコ」というわけなのである。

しかし、構造主義をウィリアムズはこのように狭い意味に限定しているのではない。もともと構造主義は、出来事、関係、記号を意味作用体系全体のうちに位置づけることを追求するのであり、或る出来事をその現われの孤立した項〔terms 条件〕、あるいはその直接的な形態で解釈することを拒むものである、と彼はとらえているから、構造主義的文学研究は、構造主義の精神とも合致しないのである。

次に検討の対象となるのはL・ゴールドマンの発生論的構造主義である。ゴールドマンの構造主義は、形式を分析するといっても、それは実在(社会的存在)の形式であり、ルカーチの『歴史と階級意識』の方法論を文学の領域で独自に変形しつつ適用したものであるがゆえに、社会的存在形態と観念形態との相同性^{ホモロジー}を認めている点で先の構造主義文学研究とは異っている。ゴールドマンの方法に関しては、拙稿「政治とクリティシズム」で触れているので、ここで更に言及する必要はないであろう。⁽¹²⁾

第三に「文学的構造主義」の名のもとでウィリアムズが取り上げるのは、アルチュセール派の構造主義であり、具体的にはピエール・マシュレーとテリー・イーグルトンのそれである。ここでウィリアムズはアルチュセール派のイデオロギー論を簡潔にまとめつつ、構造主義的マルクス主義の文芸批評に相当積極的な評価方向を与えている。勿論、それは記号論的読みとの接続を考慮してのことであろうが、『マルクス主義と文学』(1977)では構造主義に否定的な評価を与えていたことを考えると興味深い転換であるし、かつてイーグルトンが『クリティシズムとイデオロギー』(1976)で厳しいウィリアムズ批判を行ったことを考え併せるとなおのこと興味深いものがある。

マシュレーとイーグルトンの構造主義はそれまでのものとは「全く異った傾向のもの」だとウィリアムズは言う。彼らはアルチュセールの思想を継承する。社会は諸体系の体系^{システム}であって、その最終審級に於ては経済によって決定されている。そして諸審級に於ける諸実践から織りなされる関係は、「イデオロギー＝システム全体を結合する力」によって部分がより広いシステムに関係づけられるという形で維持されるのである。

イデオロギーとはあらゆる意識的な生活の条件であり、たんにある特殊な階級、グループの観念もしくは信念ではない。そしてまた「経験」(experience)はイデオロギーの領域内で勘考され、経験はイデオロギーの一般的形式とみな

される。「経験とはまさに社会の深層構造が実際に社会自身を意識的な生活として再生産する場所である」(ibid., p. 63)。経験、イデオロギーの探査、研究はアルチュセールによれば「理論」(theory)がそれを果たすことになる。

このイデオロギーについての考えを前提した上で、文学に関して述べると、マシュレー、イーグルトン流の思考方法からは、文学は相対的に特権的な状況(a relatively privileged situation)にあるのだという考えがひきだされる。その意味するところは、文学は、大部分の反映論者が考えるようなイデオロギーの運搬装置(担体 carrier)ではないということである。

ここに、マシュレーとイーグルトンが強調し、ウィリアムズが評価する点があるのだが、文学は「エクリチュール(writing)の形式であり、実践(practice)の形式であって、その中でイデオロギーが内的に距離化され、問題化されている、もしくは、されうるのである」(ibid., p. 63)。この距離化、問題化にポイントがある。文学はイデオロギー的構築(construction)をまぬがれないにしても、そのイデオロギー的構築を「たえず内的に問題化すること」が、文学が文学たる所以だからである。このことをおしすすめれば、イデオロギーの再生産と転覆とを区別することができることになるだろう。ウィリアムズはこの点に、^{セミオテツクス}記号論との接点を見出し、この観点からマシュレー、イーグルトンの構造主義を積極的に評価するのである。

それではウィリアムズは^{セミオテツクス}記号論、^{セミオテツクス}ディコンストラクション(deconstruction 解体批評、脱構築)をどのように考えているのだろうか。

彼は記号論を「^{セミオテツクス}構造主義を否定する^{セミオテツクス}構造主義言語学」ととらえている。オーソドックスな^{セミオテツクス}構造主義が文学作品を記号の体系によって生産されたものとみなしているのに対して、^{セミオテツクス}記号論においては「^{システム}生産的諸体系はそれ自身たえず構築と再構築がなされていなければならない、それがために記号の固定的性格と、我々が通常生産し解釈を行う諸体系との断えざる闘争がある」(ibid., p. 63)ということが強調される。この闘争を意識的におしすすめていくのが^{セミオテツクス}ディコンストラクションである。

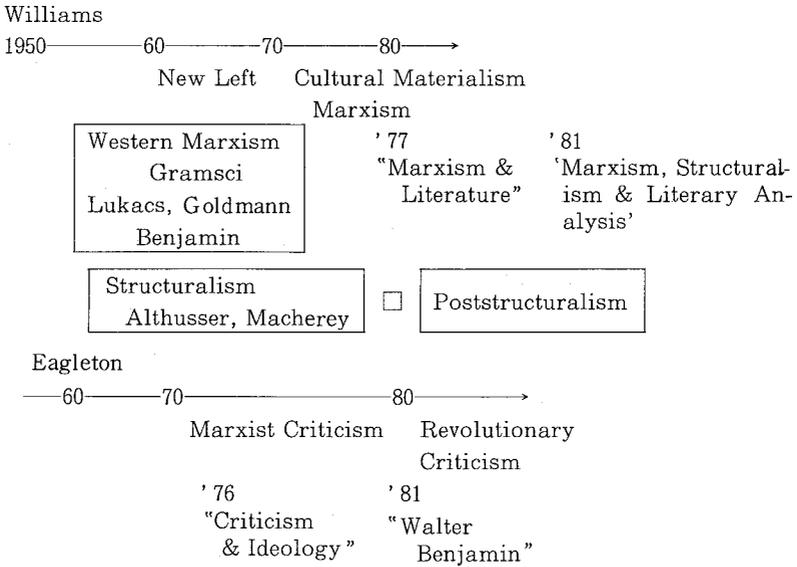
ディコンストラクションはアカデミックな解釈体系を求めない。それは「形成様式(a mode of formation)としての体系」を求める。この^{ラディカル}ラディカル・^{セミオテツクス}セミオテツクスの台頭に及んで、ウィリアムズはそれと自分の立場との接近を確認するに至った。ウィリアムズのクリティシズムの対象領域は、伝統的アカ

デミズムのクリティシズムの対象たる狭い意味での「文学」を超え、コミュニケーション、テクノロジー、等々へ広がっている。つまりアカデミズムの支配的パラダイムを踏み越えているのである。クリティシズムの対象をいわゆる「文学」に限定し、その内的構造を探求するという支配的パラダイムの拒絶、並びにパラダイムそのものを対象とするという点でラディカル・セミオティクスとウィリアムズは歩みを同じくするのである。「十分に歴史的なセミオティクスは文化論的唯物論と同様のものになるだろう」(ibid., p. 65)とウィリアムズは言う。

しかし両者の根本的な相違をも彼は認めており、その相違はセミオティクスが構造言語学と精神分析に依拠しているところにあるとしている。だが、精神分析はマルクス主義が非常に手薄で弱い所であり、また言語学はヴォロシノフ以来社会的フォルマリストの方向へ進んでいるという理由で、セミオティクスが依拠する両学問に対しても好意的な評価を与えている。

このことは一見したところウィリアムズが態度を変えたようにも考えられようが、彼が「マルクス主義文化理論における土台と上部構造」(NLR, No. 82, 1973)以来仕上げてきている文化理論の射程内からの評価であるといえるのではなかろうか。私にはとりわけ大きな理論的変更があったとは思われない。そのことは「社会における文学」(『英文学研究への現代的アプローチ』ヒルダ・シッフ編, 1977年)⁽¹³⁾を参照すれば、理論的骨格は81年の論文と大差はないことに首肯しうるであろう。文化・文学理論において実践を強調してきたウィリアムズの面目躍如たるものがあるというべきであろうが、それはまたセミオティクスにおけるイデオロギー的実践が、ウィリアムズの主張する文化戦線における闘争、実践と共通する問題意識を抱いているせいでもあろう。

R. Williams と T. Eagleton の理論的歩み



Ⅲ T・イーグルトンとポスト構造主義

ウィリアムズがJ・デリダを代表者とするポスト構造主義に積極的評価を打ち出した、前章で紹介した論文が『ニュー・レフト・レヴィウ』誌に掲載された年の81年には、T・イーグルトンがポスト構造主義を批判した『ベンヤミン論』⁽¹⁴⁾が出版されている。構造主義的マルクス主義者イーグルトンがポスト構造主義を批判するという、先のウィリアムズのケースと比較すると逆の事態が起っている。

元来、イーグルトンはアルチュセール派の理論、とくにピエール・マシュレー『文学的生産の理論のために』⁽¹⁵⁾(1966年)から構造主義的マルクス主義者としての歩みをはじめた。そして1976年に話題作『クリティシズムとイデオロギー』を出版した。フランシス・ミュルハーンによってここ「40年間にイギリスで書かれたマルクス主義文学理論における最初の重要な研究」⁽¹⁶⁾と評されたこの書物は、アルチュセール派のイデオロギ論を使って文学理論を構成しているとともに、批評イデオロギーの変遷(有名なR・ウィリアムズ批判を含む)と英国作家(M・アーノルドからD・H・ロレンスまで)のイデオロギー研究

を行っている。彼はその後、30年代ドイツの美学論争の研究（cf. ‘Aesthetics and Politics’, NLR, No.107, 1978）、演劇活動（‘Brecht and Company’）を通じて、『クリティシズムとイデオロギー』のときの「マルクス主義クリティシズム」の立場から、『ベンヤミン論』に於ける「革命的クリティシズム」（⁽¹⁷⁾ Revolutionary Criticism）の立場へと変化した。イーグルトンはそれまでのテキスト分析、概念分析の狭さから、文化的生産、文化的産物（artefacts）の政治的活用へと研究の重点を移している。マルクス主義的文化研究へと視野を広げたということは、或る意味で、ウィリアムズのいう文学＝文化の地盤へ移ったことを意味することになるだろう。最近作の『文学理論』が、Charles Swann とともに、R・ウィリアムズにも捧げられているのは、たんに恩師に捧げられたという以上の意味を持っているように思われる。⁽¹⁹⁾

イーグルトンは先のウィリアムズの論文「マルクス主義、構造主義、文学分析」⁽²⁰⁾を追うような形で「ヴィトゲンシュタインの友人達」を『ニュー・レフト・レヴィウ』誌に発表した（NLR, No.135, 1982）。この論文はヴィトゲンシュタインをめぐる友人達、例えば、ニコライ・バフチン、ジョージ・トムソン、ピエロ・スラッファを通じてヴィトゲンシュタインの思想、とくに後期ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』の思想の特質を浮び上がらせているだけでなく、これらの友人に直接つながる人々、ニコライ・バフチンの弟であるミハイル・ミハイロヴィッチ・バフチン、スラッファの友人であるアントニオ・グラムシというマルクス主義者の視角からもヴィトゲンシュタインの思想を照射し、更に、B・ラッセル、F・R・リーヴィスといった直接ヴィトゲンシュタインに係わる人々の他に、デリダ、アドルノというポスト構造主義の旗手と否定的弁証法の唱導者を裁断機及び裁断材料として利用することによって、現代におけるヴィトゲンシュタイン評価を試みている。⁽²¹⁾彼の友人達との思想的関連は、それ自体としても興味をひかれるものだが、なんといってもこの論文の構成を導いている糸はポスト構造主義に対するイーグルトンの構えである。イーグルトンは、バフチンをポスト構造主義者による彼に対する非難から擁護し、アドルノのフェティシズム論——ルカーチから引きついだもの——に歴史的解放への示唆を読みとることによってポスト構造主義との対決姿勢を打ち出している。

本稿では、この論文が誘発する論点のひとつひとつに立ち入ることはせずに、主に記号、異質性、矛盾といった概念と「主体の統一性」との関係の観点から

考察することにしよう。

その理由は、この論文が主体概念の再考と主体とイデオロギーとの関係の問題を含んでいるからである。ウィリアムズに即してふり返ってみれば、彼がイデオロギーを主体概念にひきつけた形で分析しているとは言い難い。『マルクス主義と文学』の「基礎概念」たる「イデオロギー」の分析は、彼の得意とする語義史の分析、マルクス、レーニンの用語分析に殆んどついやされている。そこでは最後にヴォロシノフが取り上げられ、社会的なシニフィアションが強調されているが、当時はセミオティクスを批判していた時期でもあり、イデオロギーと実践主体との関係がつけられているとは言い難い。ウィリアムズの理論構成は「実践」、「活動」を強調するのだが、「意識」のイデオロギー性、矛盾性の解剖には立ち入らないものとなっている。

主体とイデオロギーとの関係に立ち入った考察を行ったのはアルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」（1970年、ISA論文と略す）であった。アルチュセールの主体概念も、その受動性、非実践性の故に批判されることが多いが、なんといってもその画期性は、主体のイデオロギー性をその矛盾性、重層性に於て把握したところにある。いいかえれば、アルチュセールの主体概念はその被規定性に於て評価されるべきではなく、異質の主体の提起に於て評価されるべきであろう。

上記のことを念頭におくと、イーグルトンの論文の中でM・バフチンとアドルノについて述べた節は主体概念に関して異質性、矛盾性の観点からみられたいくつかの言及を直ちに見出すことができる。これらの言及は、それまでイーグルトンが攻撃してきた本質／現象モデル、反映モデルとは異った理論的地平に見合ったものである。フロイトとマルクスによって近代的主体の自律性は抹殺されねばならず、矛盾の主体が立てられねばならないのである。この観点からM・バフチンとアドルノが取り上げられ、論じられるのだ。

イーグルトンはM・バフチンにポスト構造主義の先取りとしかもそれを超える地平を見て取っている。M・バフチンの『マルクス主義と言語哲学』と『小説の言葉』には言語の異質性（heterogeneity「異種混交性」）、言語内部での人間主体の分断と散乱（diversion and dispersion）についての思想があり、これはまさしくポスト構造主義の思想でもある。

記号、言語はイデオロギー的領域から切り離すことができない。記号は「そ

れが取りこまれている物質的条件や社会的関係の外側では理解されない具体的な発話 (utterance) としてみなされなければならない。バフチンにとって記号は、物質的で『多アクセント的』であって、けっして安定的であったり、自己同一的ではなく、他の物質的な記号への「対話的」な方向づけに於てのみ生きているイデオロギー的闘争の推移する関係なのである」(NLR, No.135, p. 76—77)。ダイアロジックな性格はバフチンにとって小説に特有のものである。「小説の結論をもたぬコンテクストの中では『対象のあらゆる意味論的安定性も失われている』。つまり、常に『人間であることの実現されない過剰 (surplus)』が存在し、その中で人間主体そのものはラディカルに分割され、『人間は自分自身と一致するのをやめる』のである」(ibid., p. 77)。ここで主体の同一性は破壊されている。

そしてイーグルトンは主体の統一についてバフチンの言葉を借りて次のように言う。

「主体の統一 (the unity of subject) は結局イデオロギー的構成物でしかない。『人間の統一と行為の一貫性は……修辭的で法制的な性格からなるものである』」(ibid., p. 78)。

さて、バフチンにみられる主体の統一の破壊は、他方、アドルノに於ては同一性の否定としてあらわれる。ここでいう同一性とは、ルカーチ『歴史と階級意識』の物象化論から取られている概念であって、「同一性はイデオロギーの原初形態」(ibid., p. 81)である。アドルノにとってこの同一性から逃れることが課題となるが、その方法はデリダのディコンストラクションと同一方向にたどっているのである。

「アドルノもデリダも『思考にとって異質的なもの全て』を思考自身の契機として把握しようと奮闘している。しかしそのような異質性は不可避免的に思考されねばならず、『思考の内在的矛盾として思考それ自身のうちに再生産される』ほかないのだから、その試みは常に自分を炸裂させる危機に頻してヨタヨタ歩くことになる」(ibid., p. 81—82)。

上の評言にみられるようにイーグルトンはアドルノにおけるポスト構造主義の先取りを確認するのだが、他方でアドルノの思考はルカーチのそれと同じく著しく「本質主義的」でもあったし、またそれゆえのポスト構造主義に対する優位性をも確認するのである。ここでいう「本質主義的」とは、商品社会に於

ける商品形態（商品フェティシズム）から思考形態を導出するような思考態度を指す（イーグルトンはA・ゾーン＝レーテルの『精神労働と肉体労働』をも引き合い出している）が、思考、あるいは記号を商品フェティシズムの、つまりフェーティッシュな社会的内容のただ中でとらえ、再考するという営みこそ、その「本質主義的」特徴にもかかわらず、ポスト構造主義に欠けているものとイーグルトンは主張するのである。ここにこそ、ヴィトゲンシュタインが執拗に追求した形而上学的なものからの解放の糸口がある。だが、そのためにはグラムシの言う政治学的なものへと進んでいく必要がある。なぜなら、イーグルトンが言うように革命的政治学の問題は「図書館の開いている時間の問題」ではないからである。

IV R・カワード、J・エリスと異質的主体の思想

前章で、バフチン、アドルノの思想を素材にした、イーグルトンによる、主体の統一性の破壊、異質的主体概念の提出に言及したが、この異質的主体概念については、R・カワードとJ・エリスが『言語と唯物論——記号学における発展と主体の思想——』（1977年）の中で、立ち入った分析と検討を既に行っている。とくにその第5章「マルクス主義、言語、イデオロギー」において、構造主義的マルクス主義の立場、とくにラカン、クリステヴァまで理論的視野に入れたカワード、エリスの立場から、マルクス主義の主体概念の整理と一定の展開を行っているので、今までの叙述と関連するかぎり、彼らの主張を追ってみたい。それはI章からIII章まで述べてきたことを側面から照し出すことになるであろう。⁽²²⁾

カワード/エリスは、「自我の連続性は神話である。ひとりの人間は永久に分解し、また新たに形をなすアトムである」（Brecht on Theatre, Methuen, London, 1964, p.15）というブレヒトの言葉を引いているが、この言葉は彼らが理論的に探求しようとしている事柄を象徴的に表現しているといえるだろう。⁽²³⁾

「自我の連続性」とはブルジョア・イデオロギーに属するものなのである。それは「矛盾的主体をしかるべき場所に置き、彼が活動できるように彼自身の諸々の行動に対する首尾一貫性と責任の位置に彼を置くのである。……主体は自分自身の活動の起源のように見え、彼自身の活動とその諸結果に対して責任をもつもののように見えるのである」（Coward/Ellis, *ibid.*, p. 75）。この

自我の連続性を前提する主体が、同質的主体（homogeneous subject）である。同質的主体は資本主義的社会関係の商品交換関係と相補的な関係にある「自由な主体」である。それはマルクス『資本論』の交換過程論に書かれてある自由な主体を思い起せばよい。バシュカーニスの理論を持ち出すまでもなく、交換過程は資本主義社会の法的主体の出発地点である。

同質的主体は、自己を観念と行為の起源点（the point of origin）と考え、自己の行為に対し責任をもつものと考え、このような自由な主体は我々が日々前提しているものであり、また哲学的にはカント的主体として表象されるものではなからうか。

カワード/エリスは、この自由な主体、法主体、同質的・無矛盾的主体をマルクス主義思想と関係づけて、それはアルチュセールが主張するようなヒューマニズムのイデオロギー、「人間の本質」を返還請求する疎外論の主体概念であるとみなしている。ヒューマニズムは人間本質論の延長線上にある。この人間本質論の確立に与ったのがフォイエルバッハである。フォイエルバッハの主体は「欲望する自我、即ち、社会あるいはその環境によって動機づけられるだけで決して否定されない人間『存在』」（*ibid.*, p. 91）である。カワード/エリスは、フォイエルバッハの人間に関する思想から二つの主要モメント、人間の統一を欠乏の人間の形で定立する傾向と、他者とは葛藤しても自分とは葛藤しない統一主体としての人間、を取り出し、この二つのモメントはマルクス主義にも継承され、今なお主体に関するイデオロギー理論の展開の阻害要因になっていると考えている。

エンゲルスによる経済的闘争、政治的闘争、イデオロギー的闘争の三領域の設定は、実践という用語を用いるならば経済的实践、政治的实践、イデオロギー的实践ということになる。このうちイデオロギー的实践に関する分野が史的唯物論の弱点であり、それは主体に関するマルクス主義的分析の欠如とも対応している。求められているのは、「新しい主体を定立する哲学をもった科学」（*ibid.*, p. 83）である。マルクス主義がこれまで明らかにすることができなかったところの矛盾的人間主体がいかにか構築されているかということ、イデオロギー的实践によっていかにか構築されるかということが明らかにされねばならないのである。

イデオロギー的实践を扱うには、イデオロギー＝誤った意識、観念体系とい

う考え方から離れなければならない。イデオロギーにたんなる虚偽意識という意味だけではなく、「社会に於ける主体の活動のための基盤」=社会的実践、という意味を読み取ったのはアルチュセールだった。しかしアルチュセールは、イデオロギーの物質性の理解において「具体的」・経験的なものに依拠しすぎ、またイデオロギー論に於ける個人のイメージ的な関係の理解に関しても無矛盾の全体の担い手として個人を捉えることによって理論的不十分さを露呈していると、カワード/エリスはみている。

イデオロギー的实践が物質的であるという意味を、カワード/エリスは次の二つの意味で捉えている。「まず第1に、それは具体的な制度において生産され、再生産されるからである。第2に、それは個人がそこで自分自身を表象するという固定された諸関係と諸位置、社会的形成の過程に於ける物質的な力である諸関係と諸位置を生産するからである。イデオロギーは個人を彼あるいは彼女が置かれている社会的過程の内部での表象に対する関係に於て、過程よりもむしろ自己同一性アイデンティティ（自己証明の地点）として生産するのである」(ibid., p. 77)。イデオロギーをこのように把握することによって、主体と従属の関係(subject = subject)、主体化 = 従属化(subjection)の機制解明の端緒がつかまえられる。

この主体化=従属化が働く場に於て、「個人は、複数の表象において与えられた複数の、時として相反する主体的位置を占めることができる」(ibid., p. 68)。このことの確認が、主体を矛盾的主体概念、異質的主体概念へと導くのである。もちろん主体だけが異質的・矛盾的であるのではない。主体の外部のトータルティ全体性に目を転ずれば、全体性も異質性(heterogeneity)から成っている。

異質の全体性と異質的主体性との関係、異質的外部による意識の決定、客観的矛盾による個人の構成、「否定性によって横断され、否定性によって構築された主体」(ibid., p. 90)。この理論的地平に於てマルクス主義の主体概念は把握されるべきなのである。

以上、カワード/エリスの主体概念に関する諸点を追ってきたが、このことだけでもR・ウィリアムズやT・イーグルトンの思想に今までとは違った光を当てることができると思われる。カワード/エリスが依拠するラカン、クリステヴァの精神分析の理論を使用すれば尚更そうであろう。

〔以下、主体概念と史的唯物論の定式を論ずる予定だったが、紙数がつきた。〕

他日を期したい。]

(注)

- (1) R. Williams, *Marxism, Structuralism and Literary Analysis*, *New Left Review* (以下 NLR と略記する), No 129, Sep- Oct, 1891.
- (2) T. Eagleton, *Wittgenstein's Friends*, NLR, No 135, 1982.
- (3) Dave Laing, *Marxist Theory of Art*, Harvester, 1978.
- (4) Cf. D. Laing, *ibid.*, p. 137 f.
John McGrath (7 : 84 group), Ricard Seyed (Red Ladder), Trevon, Griffiths, John Allen, Ken Loach 等の名前を挙げている。
- (5) 英国マスコミ研究の紹介として、佐藤毅「イギリスのマス・コミ研究」、『現代マスコミュニケーション論』青木書店(1976年)がある。
- (6) 但し、バーミンガム大学で研究する者が全て、文化論的唯物論という訳ではない。例えば、構造主義の思考を、ポスト構造主義と言っている以上に更におしすすめた『言語と唯物論』で知られる R・カワード、J・エリスは共にバーミンガム大学で研究していた。カワード、エリスはこの書物の中で CCCS グループへの批判とみられる見解を打ち出している。「その〔=「歴史を作るのは大衆である」という定式化、「真理」は労働者階級の進歩において見出されるべきであるという信仰〕もっとも粗雑な形では、歴史は、社会主義への不可避の行進において労働者階級によってなされる一連の抵抗に歪曲されてしまう。この傾向は、とりわけ、英国のマルクス主義に、また社会学、文化研究、コミュニケーション研究へのその貢献にあてはまる。ここでは、この傾向が支配的なのである」(同書、p. 9)。
- (7) Cf. BSA 報告集冒頭の論文 'Representation and Cultural Production'.
- (8) 以上、R・ジョンソンの分析による。Cf. BSA, p. 51.
- (9) Ricard Hoggart, *The Use of Literacy* (1957), Chatto and Windus; Raymond Williams, *Culture and Society* (1958), Chatto and Windus; *The Long Revolution* (1965), Penguin; Dona Torr, *Tom Mann and his Times* (1956); D. Torr, *Democracy and the Labour Movement* (1954); Edward Thompson, *Making of the English Working Class* (1963); E. J. Hobsbawm, *Primitive Rebels* (1959); Christopher Hill, *The World turned upside down* (1972), Penguin.
- (10) Anderson, *Origins of the present crisis*, NLR, No 23, 1964; Nairn, *Anatomy of the Labour Party*, I, II, NLR, No 27, 28, 1964; Thompson, *Peculiarities of the English*, *Socialist Register*, 1965 etc.
- (11) Eagleton, 'Criticism and Ideology', NLR, 1976; B. Hindess and P. Q. Hirst, *Precapitalist Modes of Production*, Routledge and Kegan Paul, 1975; P. Q. Hirst, 'The uniqueness of the West', *Economy and Society*, vol. 4, no. 4, 1975; Rosalind Coward, 'Class, "culture" and social formation', *Screen*, vol. 18, no. 1, 1977.

- (12) L. Goldmann に関しては, R. Williams 自身が, NLR, No.67 May-Jun 1971, でゴールドマン論を書いている。'Literature and Sociology: A memory of Lucian Goldmann' 参照。なお, David Forgacs, Marxist literary theory, in: *Modern Literary Theory*, (ed.) Ann Jefferson & David Robey, Batsford Academic and Education Ltd., Loudon, 1982, p. 151ff. 参照のこと。Forgacs はこの論文で文学に対するマルクス主義のアプローチを、①反映モデル, ②生産モデル, ③発生モデル, ④否定的知識モデル, ⑤言語中心的モデル, の五つのモデルに分け, 発生モデルのもとにゴールドマン理論を扱っている。この分類から一見してわかることは, 構造主義的マルクス主義, マルクス主義的言語学, アドルノに重点があるモデル構成となっており(どちらかといえば, 生産モデルは反映モデルとともに伝統的モデルに組み込まれることになるう), R・ウィリアムズの占める位置はない。
- (13) R. Williams, *Literature in Society, Contemporary Approaches to English Studies*, ed. by Hilda Schiff, Heineman Educational Books Ltd., London, 1977.
- (14) T. Eagleton, *Walter Benjamin or Towards a Revolutionary Criticism*, Verso, London, 1981.
- (15) Pierre Macherey, *Pour une théorie de la production littéraire*, Maspéro, 1966. イーグルトンには『文芸批評とイデオロギー』(1976年)以前の, 1966年から著作があるから, 「出発した」というのは誤解を生みやすいが, 構造主義的マルクス主義の批評家として出発するのには, P・マシュレーの著作が大いに与っている。
- (16) Francis Mulhern, *Marxism in Literary Criticism*, NLR, No 108, 1978, p. 38.
- (17) この立場の変化をイーグルトンは『ベンヤミン論』の序文で述べている。
- (18) T. Eagleton, *Literary Theory*, Basil Blackwell, 1983.
- (19) マルクス主義とポスト構造主義との関係を論じる際に, イーグルトンの『ヴァルター・ベンヤミン』(1981年)は, マイケル・ライアン『マルクス主義とディコンストラクション』(Michael Ryan, *Marxism and Deconstruction*, The Johns Hopkins University Press, 1982)とともによく取り上げられる。この二者に関しては, 簡単な紹介が富山太佳夫「ディコンストラクション」(『現代思想』1983年1月)によってなされている。イーグルトンがディコンストラクションをブルジョア・リベラリズムの繰り返し, と批判するのに対して, ライアンは「解体批評」を社会=政治経済の理論にまで拡張することによって, そこに欠けていた次元を付与する」という見地から積極的な評価を与えている。そして, 富山氏は二人とも, ディコンストラクションとアドルノの方法との共通性を認めていることに言及されているが, このドイツとフランスの思想の接点ともいうべき地点は今後もっと探求されてしかるべきであろう。なおライアンについては, 「マルクスとデリダ」(『現代思想』1983年3, 4月)も参照のこと。
- (20) 話が前後するが, このウィリアムズの論文が発表されたのは, たんなるポスト構造主義に対する理論的アプローチではなく, その背景には, 構造主義, ポスト

構造主義に対する評価を迫られたという具体的な事情が存在した。“New Left Review”編集部は論文紹介で次のようなコメントを付している。‘In the early months of this year structuralist, semiotic and Marxist approaches to literary studies became the improbable objects of public controversy in Britain. The centre of this intellectual turbulence was Cambridge University’s English Faculty, where deep seated internal conflicts had come to a head over a sharply disputed tenure decision, ……’.

- ① このいささか「鈍重」（『新明解国語辞典』初版参照）なマルクス主義文芸批評家の論文は、すばやく翻訳されている。「ヴィトゲンシュタインの友人達」室井尚訳（『現代思想』1983年12月）。
- ② R・カワードとJ・エリスは、兩人ともケンブリッジ大学、バーミンガム大学で学んだ経歴をもつ若手の理論家である。『言語と唯物論』（“*Language and Materialism: Developments in Semiology and the Theory of the Subject*”, Routledge & Kegan Paul, 1977）の「謝辞」には、本稿第I章で言及したりチャード・ジョンソンの名もみえる。彼らは文化論、映画論の分野で活躍し、J・エリスは『スクリーン』誌編集部にも籍を置いている。
- ③ Coward / Ellis, *ibid.*, p. 75.